

# 第 1 章

---

## 言語理論

### —言語とかかわるためのリソースとして—<sup>資 源</sup>

クリスチャン・マティスン

Christian M.I.M. Matthiessen

翻訳 照屋一博

#### 1. はじめに—言語から言語理論へ

この本の焦点は、体系機能理論によって映射された言語にある。この章では、調査の対象となる言語を出発点とし、まず言語になじむことによって、言語現象をとらえる理論である体系機能理論へと論をおしすすめ、体系機能言語学のいくつかの主要な素性を、段階をおって導入しようとするものである。それにかわる方法として、現代の言語理論全般に体系機能理論を位置づけるしかたもある。もし体系機能理論がそれらの理論に反駁するかたちで形成されたのであれば、そのような位置づけも意味をなすであろう。しかし、現実はそのようではなかった。体系機能理論の形成は、実際、現行の言語理論よりさらに時をさかのぼる。それにくわえ、後者の位置づけは、ここで調査の対象となる現象、つまり言語を背景化するという、かなり不利な点をかかえている。そこでわれわれは、まず言語を舞台の中央に位置づけることからはじめなければならない。

言語は、光輝にみちている。その現象全体がゆたかであり、多面的なリソースであると同時に、人間生活全般の一部でもある。たとえば、学術分野についていえば、われわれは、人間の脳を研究するさいに言語と対峙し、言語が脳の部分全体を関連づけ総括する唯一のシステムであることに気づかされる。事実、神経科学の最先端をリードする科学者は、人間の脳がこのよう

[1]

に複雑である理由を、脳が言語とともに進化したからであると説く (Deacon, 1992, 1997, および Edelman, 1992 を参照)。つまり、このことは、人間の脳が「言語脳」(Halliday, 1995 参照)であることを意味している。同時に人間の社会集団を研究する場合、われわれは、また言語と直面し、言語が社会集団を統括し、その社会集団を構成するおのおの個人がになわされた役割を演ずることを可能にする主要なリソースであることを知る (例, Dunbar, 1996)。つまり、人は、社会的主体、あるいは「意味する人」であり、社会集団とは、「意味集団」である。

「厳正な」言語理論とは、このようにゆたかな言語の多面性と関わるものでなければならない。この章では、まず言語のそのゆたかな多面性を探求することからはじめる。まず、言語と関わるためのストラテジーについて述べ、ディスコース日記、ディスコース地理、テキストアーカイブ、そして音声ヨガなどのストラテジーについて具体的に述べていく。

## 2. 言語への着眼

どのような調査分野においても、われわれは、調査の対象となる現象を観察したり探求したりする方法を開発しなければならないと同時に、観察事柄を分析し、記述し、理論化しなければならない。物理体系内の現象の調査において、ケプラーやガリレオ、ニュートンなどのような近代初期の科学者たちは、常識や民衆科学が作りだした「障害」をとりのぞくことによって現代科学へと接近した。それは、一方では、(a) 科学技術（とくに望遠鏡）の発達が「裸眼」でしか見えなかった物理の領域をさらに観察可能なものとし、他方では (b) 数学の発達が観察の可能となった対象を分析し、記述し、理論化することを可能にした。ニュートン自身、うごきを分析、記述、理論化するために、数学の範疇で微分積分学の発展に貢献している。

物理現象を対象とする調査研究における現代科学へのこのような突破口は、物理と意義というふたつの「次元」の発達に依存している。(i) 物質 **material** の次元において、科学は、望遠鏡や顕微鏡や六分儀などの発達によって、日常生活の枠幅から人間の知覚を逸脱させ、さらに、科学者に人為的かつ制御された環境を構築させ、それらによって電気のような物理現象の実験を可能にした。(ii) 意義 **semiotic** の次元における科学の発達は、あたら

## 第2章

---

# 意味づくりの<sup>資</sup>源

## —日本語の体系機能文法と言語分析—

照屋一博

Kazuhiro Teruya

### 1. はじめに

言語は、意味づくりの体系である。言語をつかさどるわれわれは、意味の潜在性を秘めた言語をリソース（資源）として活用して、わたしとあなたとの関係にはじまる社会活動を可能にしてきた。たとえば「猫が顔を洗うと雨」という気象に関することわざ、観天望気は、古来よりわれわれが経験的に体得してきた知恵を言いつたえたもので、猫のグルーミング行動を「顔を洗う」ととらえ、その行為と「雨がふる」という自然現象とのあいだに反復的に観察できる関係を、ある天気の兆候として論理的にとらえようとした。実際にあるていどの実証が可能であるとしても、両者のあいだには、人間の論理づけ以外なにも存在しない。それは、科学理論と科学技術によって得られる大気の状態に関する情報にもとづいてつたえられる天気予報、たとえば「5日は、沖縄本島地方は、台風13号の影響で所により雷をともない非常に激しくふるでしょう」とは、表象される経験の背後にある現象やその観念的なとらえかただけでなく、意味づくりのしかた自体が異なっている。

人間の経験は、このように言語化され、無関係としか思えない猫と雨の関係をとらえるだけでなく、ある場合は、話しことばのように生成と同時に瞬時に消滅しながら、またある場合は、この言いつたえのように世代や記憶をこえてつたえられていく。つたえるという言語行為は、つたえる側からすれば一方向的だが、つたえられる相手が存在するという点で同時に双方向的

でもある。21世紀の現在、つたえるしかたも、口つたえや紙などの媒体を使った印刷物だけではなく、インターネットのような通信技術の発達によって、言語は多様な形態で瞬時に伝達・共有される検索可能な情報としても存在している。

インターネット上で情報として検索・提供される猫と雨のことわざとしての関係は、異なる言いまわしで具現されると、伝達以外の機能をもつようになる。たとえば、真偽をたずねる文「本当に猫が顔を洗うと雨？」は、情報サイトでインタビューの見出しとして機能し、規定修飾として機能する「猫が顔を洗うと雨が降る動画」は、「動画」の属性をあらわしながら、ブログという形態の異なるマルチモーダルなテキストに組みこまれていく。さらに、「#猫が顔を洗うと雨が降る」のようにハッシュ記号「#」でハッシュタグとして投稿・拡散されると、同ハッシュタグのもとでこの言いつたえに関連するさまざまな情報が統括されながら、議論フォーラムやマスコミ、宣伝広告、ある場合はスローガンとして、異なるテキスト環境で多様な社会機能をはたすようになる。つまり、この猫と雨に関する人間の経験は、言いつたえのわくをのりこえ、異なる言いまわしでその意味のすがたを変えながら、さまざまな社会・テキスト環境でわれわれの言語による社会活動を可能にしている。

本章では、現代日本語がその意味・形式的なすがたを変えながら、テキストの環境の中で意味を生成し、われわれの社会意義活動を可能にしていることを、体系機能的な日本語の記述 (Teruya, 1998, 2004, 2007)<sup>1</sup>をもとに分析をとおして例示する (日本語・国語学における機能的なアプローチは、奥田, 1985を参照)。体系機能的な言語の記述は、1950年代のハリデー M.A.K. Halliday による、初期の体系機能理論にもとづいた中国語の記述と比較 (Halliday, 1956, 1957, 1959) を先頭に、90年代にはいると語族の異なる言語の記述がその数をまししながら、精力的におこなわれている。体系機能的な言語記述は、言語を規則の束ととらえる古典的な日本語の記述とは異なり、「できないこと」、つまり非文法的なことがらを同定し、一覧化することで記述しようとするのではなく、「できること」、つまり、言語のもつ意味の潜在性を理論的側面からとらえ、それを意味・文法の具現関係の明細をもつ選択肢の体系、システム system として全体像をとらえようと

## 第3章

---

# 社会意義活動と意味の具現化

## —レジスターの体系機能的分析—

照屋一博, クリスチャン・マティスン

**Kazuhiro Teruya and Christian Matthiessen**

### 1. はじめに

森羅万象の現象を意味に具現化する言語は、特定の社会コンテキストで創出される意味の総和を系統化する。それは、たとえば、招待状、アドバイス、抗議、ドラマ、日記、小説、講演などのように人間の言語活動を名詞系列に語彙化することであり、あるいは、法律文書のように法律的な事項の相互関係を、たとえば「未成年者禁止法違反被告事件」「再審開始決定に対する即時抗告棄却決定に対する特別抗告事件」のように名詞化することで、一般文書を排他的にみながら専門文書としてテキスト化することである。このように意味を異なるレベルで系統化する言語は、ある特定の社会言語学的特徴を内包しながら、多様なテキストタイプとして人間の社会意義活動<sup>1</sup>を具現化している。

言語の使用は、千変万化である。しかし、ある状況のコンテキストで展開する話しことばのテキストが容易に「政治演説」だとわかるように、状況のコンテキストとテキストは系統的に相関している。この相関性によって、状況のコンテキストと関連する意味が選択され、その表現形式が決定される。言語使用者は、言語発達の過程で言語の具現化のバリエーションを体得し、関連する状況や期待される言語を予測しながら社会言語活動をいとなむ。言語理論的に言うと、このような予測を可能にするのがレジスター register と呼ばれる概念で (Halliday, 1978: 32; Matthiessen, 1993; Ure, 1982; Biber, 1995;

Biber and Conrad, 2009; Biber and Finegan, 1994), レジスターは、言語の使用におけるバリエーションを指し、予測でとらえることができる言語の様相を意味している。状況さえわかれば、そこに現象する言語を高い確率で予測できるのがそのあらわれである。ここで理論的に重要になってくるのは、そのような予測を可能にする社会コンテキストの本質とそこに具現化する言語との相関性をあきらかにすることである。

しかし、ここでいう本質と相関性とは、頭語や見出し語などのような「ジャンル標識」(Biber and Conrad, 2009)としてはたらく表現構造が、たとえば「拝啓」が書簡文を、そして「大雪、週末直撃 交通混乱、入試にも遅れ」[朝日]が新聞記事をその代表例とする報道文をあらわすということを示してはいない。

たしかに、このようなジャンル標識は、「起承転結」という文章構造が一般文書を総体的にとらえることで、核となる結論を文頭におく新聞記事を区別することができるように、ある特定の表現や構造に主眼をおくジャンルの判定には有為である(佐野他, 2009)。

しかし、相関性のない孤立した表現や構造では、レジスター的特徴をとらえることはできない。それは、「拝啓」につづく書簡の内容や、見出し語のさすニュース報道の素性がそれだけでは予測できないことにあきらかである。このことは、そういったジャンル標識が、あるテキストタイプがジャンルとしての有標性をもっていることをさすだけであって、あるレジスターに属することを知らしめる支配的な社会言語学的特徴をあらわしてはいないことを意味している。言いかたをかえると、このような有標性は、状況の可視的な特徴を示すだけであって、それ自体が状況のコンテキストの特徴をつくりだしてはいない。

本章では、状況のコンテキストと言語学的に相似性を有するテキストタイプとの相関性に着目し、レジスターを機能的な観点からアプローチする。そうすることで、言語テキストをテキストタイプに類型化する。具体的には、体系機能理論と修辞構造理論を活用しながら、テキスト例を修辞・文法的に分析し、テキストタイプとしてのレジスター類型を提示する。このレジスター類型は、言語のもつ意味の潜在性全体を典型的にとらえたものであり、意味のまとまりとしてのテキストの系統的な研究を可能にするものでもある

## 第4章

---

# マルチモダリティの方法論と理論的課題

ジョン・ベイトマン

John A. Bateman

翻訳 照屋一博・水澤祐美子

### 1. はじめに 方法の必要性

マルチモダリティに関するすべてのアプローチに未だに残存する最も重要な課題は、異なるモード **mode** (様態) の情報がどのように共に作用するのかという中核的な疑問である。つまり、潜在的に異なる特性をもつ根本的に異質であるメッセージの要素が、どうやって個別になしとげられる「以上」のものをまとめて生成するのかということにある (Lemke, 1998; Liu and O'Halloran, 2009; Holly, 2009 を参照)。ここでもっとも顕著なのは、専門分野内外で得た豊富な経験があるにも関わらず、異なるモダリティとそれらのまとまりに関する多くの根本的な疑問は、未だにコンピュータプログラム用で印象的な方法でしか答えられていないことである。さらに、どのように主要な用語が使用されるのかという点で相互に交差するような、そして極端に流動性をもつような提案とともに、モード (様態) の特徴づけと、メディアやジャンル、物質性、デザインなどその他多くの広範な構築物との相互関係があきらかに不鮮明なままにあることである。

マルチモーダル分析の大部分は、異なる表現上のリソース (資源) のまとまりをとりあげ、ケースバイケースで議論されるような「実況解説」として表現された個別のテキストの論証という形式でしかない。そういった論証は、ハリデー (Halliday, 1994: xvi) がディスコース分析において、そして、フォースヴィル (Forceville, 2007) がマルチモーダル議論において厳しく批判したように、適切な方法論的な手引きの欠如のせいで、場当たりのなもの

になりがちである。すなわち、それらは、現行のアプローチが追求しなければならないマルチモーダルの人口物 artifacts とパフォーマンス performance の応用と記述をあきらかにする役目を確かに果たしているかのように見えはするが、将来なされなければならない進展に必要なものではなく、その実証的な基盤の欠如は、かなり貧弱なものしか見せてはくれない。

個別のテキスト分析であれ、分析結果の蓄積に貢献できるような分析のガイドラインを設定し、それを使った実証的な検証を奨励する必要がある。この点においては、シュトクル (Stöckl, 2016) がビョークボルを引用して述べたように、マルチモダリティは「まだ新興段階にあり、方法論を開発する余地と必要性をもつ分野である」(Björkvall, 2012: 18) というのにまったく同感である。

## 2. 意義モードの定義

したがって、われわれは、まず興味のある意義ある人口物とパフォーマンスが出現する、そういった基本的な範囲を明白にすることからはじめなければならない。この章は、視覚、聴覚、そしてその他の物質的に現存する意味づけの実践と言語が結合するすべての事例に関するものである。これらの実践は、クルウグとシュトクル (Klug and Stöckl, 2015) が説明するように、最近では、物質性とメディア性、「コード性」、感覚モダリティ、処理メカニズム、そして社会文化的慣習のある局面を合成したもの、つまり、意義モード **semiotic modes**<sup>1</sup> (Kress, 2014; Stöckl, 2014) という概念でふつう特徴づけられる。それらは、これらの局面がいかに生産的に協働するのかをあきらかにするために、もちろん緻密でなければならない。

そのため、意義モードを形成するモノの存在論的な分析からはじめよう。ここでいう存在論的とは、興味をもつものにどのような意義モダリティが存在していなければならないのか、また、それらのモダリティがどのような内部構造をもっていなければならないのかということを決定するという意味である。その結果として得られる枠組みは、マルチモーダル研究における昨今の未解決の問題や疑問に光明を投げかけ、そしてさらに、特定の分析方法がどうあるべきかを提言するのに用いられる。さらに、このことが必然的に意義的な試みであることから、比較対照をたすけ、不可欠な意義基盤と枠組み

## 第5章

---

# 体系機能理論を援用した マルチモーダルテキストの意味づくり —絵本を活用した検討過程の可能性—

奥泉香

Kaori Okuizumi

### 1. 目的と背景

本章では、ことばによるテキストと図像とを組み合わせることで構成されたマルチモーダルテキストの学習において、体系機能理論を援用することによって、どのような意味づくりの方法や、意味づくりの過程が展開可能となるのかを例示・検討する。また、そういった方法や過程を特に国語科教育に採り入れることによって、どういった学習の可能性を拓いていくことができるのかを考察する。

このテーマについて検討・考察することは、近年特に言語教育の分野において必要視されている。その理由の一つは、学習者を取り巻くテキスト環境が、周知のように通信技術の発達やグローバル化、知識基盤社会の到来といった要因によって、大きく変化してきているからである。

オーストラリアの言語教育研究者レン・アンズワース Len Unsworth とクリス・クレイライ Chris Cléirigh は、こういったテキスト環境の変化の中でも、特に「紙媒体においても電子媒体においても、マルチモーダル（複モード）化の傾向を無視することはできず、この点を考慮した学習内容・学習方法の再構築を検討する必要がある」（奥泉訳）と述べている（Unsworth and Cléirigh, 2009: 151-164）。モードとは、この場合、歴史的な流れの中で、「意味づくりのために社会的に形づくられ、文化的に付与されてきた意義的」な

リソース semiotic resources」(Kress, 2010: 79, 奥泉訳) のことである。そしてテキストのマルチモーダル化とは、文字や音声、映像、さらにはそれらを構成している色や形、配置関係といった意味づくりのリソースが、複合的に組み合わされてテキストが生成され、意味づくりがおこなわれている現象のことを指している。

こういった流れを受けて英語圏を中心とする母語教育の教育課程においては、1988年英国イングランド及びウェールズの教育改革法によるナショナルカリキュラム<sup>2</sup>の策定を皮切りに、カナダ、オーストラリア連邦、ニュージーランド、アメリカ合衆国等において、テキストのマルチモーダル化に対応する学習内容を系統的に扱うための教科領域や下位領域を工夫する試みが重ねられてきている(奥泉, 2006)。そして、マルチモーダルテキストの学習を有効に実現するための学習材の開発や、学習方法の整備・検討も盛んにおこなわれてきている(Kress, 2010; Painter, Martin and Unsworth, 2013; Unsworth, 2014; Bateman, Wildfeuer and Hiippala, 2017)。

上述のような背景を受けて、本章ではマルチモーダルテキストの一種であり、絵とことばという2種類の異なるモード間から意味づくりを体験・学習することのできる絵本に焦点を当てて、その意味づくりの方法や学習可能性について考察する。マルチモーダルテキストの中でも、絵本に着目するのは、Nikolajeva and Scott (2001: 1) も述べているように、絵本が「絵とことばという互いに独立性を持った異なる2種類のモード間の力学」(奥泉訳) によって構成され、意味づくりがおこなわれる媒体であるからである<sup>3</sup>。本章では、こういった特徴を具えたマルチモーダルテキストからの意味づくりについて、体系機能理論を援用することによって、どういった検討方法や具体的な検討過程が可能となるのかを、先行研究を基に検討・例示する。また、実際にそういった検討方法を中学生を対象とした国語科授業に導入することによって、どういった検討や意味づくりを、生徒がおこない得るのかという可能性についても検討・考察する。

## 2. 絵本の読みの研究に必要なマルチモーダルテキストの検討方法

絵本研究が今日まで長い歴史を持ち、興味深い優れた研究の蓄積を持つことは疑いようもない。しかし絵本が、児童文学から独立した研究領域として

## 第6章

---

# 意味づくりを拡張する外国語・第二言語発達 — 体系機能論的な貢献 —

ハイジ・バーンズ

Heidi Byrnes

翻訳 照屋一博 水澤祐美子 奥泉香

### 1. はじめに

外国語・第二言語 (L2) に関する研究文献で現在なされている議論を鑑みると、グローバリゼーションという現象が、多言語主義の劇的な増大ともなって、外国語研究 (の分野) における、たとえば、オントロジー、認識論、理論面、実証研究の方法論、そして、とりわけ教育学的な事項に新たな課題を投げかけているということは疑う余地がない。こういった実情に言及してきた数ある著作物のなかで、みずからをダグラスファーグループ The Douglas Fir Group と称する研究者グループによる昨今の対応が、いくつかの理由で際立っている。まず一つ目に、グローバリゼーションの多角的な側面とそれらがあたえる言語学習と言語使用への影響をとらえるために、グローバリゼーションと高度技術化、そしてモビリティ (流動性) を明白に連結させている点である。二つ目は、彼らが学問領域をこえた transdisciplinary な枠組みを提案し、「教育や多言語・多言語リテラシーの発達、社会的な統合、そして多様なコンテキストにおける言語運用という点において、生活のさまざまな段階で一つ以上の言語を使って生活することを学ぶ、そして実際にそうやって生活している人びとの差し迫った必要性に対応している」(The Douglas Fir Group, 2016: 20) 点である。そして三つ目は、その著者 15 人は、理論的背景が異なるにもかかわらず、言語と学習という現象が意味と意味の

具体化,そして,自己適応的で局所的なパターンの現出をもつという三点で意見が一致していて,「私的,公的,物質的,そしてデジタル化された社会的コンテキストにおける人びとの生活のなかで多言語主義がどのように展開しているのか」ということを解明するためには,認知,社会,情緒的な視点が不可欠であると明記していることである。そうすることで,彼らは,研究や言語教育・言語学習の実践において,「言語は形式的な規則にもとづいた閉ざされた体系」であって「学習とはたんに,または,第一義的に認知的な現象として概念化されるものだ」と特徴づける,この分野における支配的で執拗な因習からの決別を唱えている(The Douglas Fir Group, 2016: 21)。すでに述べたように,これらの著者が意図しているのは,「学習者個人を超えたところの力作用を考慮にいれて,あらたに学習される言語の言語学的発達をふくめた言語学習と言語教育の根本的な理解を深める」(The Douglas Fir Group, 2016: 20)ことである。

私は,この英智に富んだ状況を設定することで,本章をこの本に位置づけたい。この本は,日本の読者層にむけて,日本語で体系機能言語学(Systemic Functional Linguistics, 以下「SFL」と略)を紹介するために,多様な学究的論文を集成したものである。SFLは,簡単にいうと,比類ない言語理論である。たとえば,これまでとりあげてきたトピックのはばにおいて,そして,これまでの(とりわけ欧米以外の)多様な言語の探求が理論的に深く,実証的な基盤に根ざしている点において比類ない。さらに,意味を人間の言語の中核的特徴としてとらえ,人間の言語化自体を社会的活動として特徴づける点において他に類をみない。

このような包括的な目的のなか,私個人の興味は,きわめて限られている。この章のタイトルが示すように,私がここであきらかにしたいのは,ほかの章でとりあげられているSFL理論でも,その多様な側面でもない。それよりも,教育をあきらかにすることであり,そのなかでも焦点は,指導による第二言語発達をよりしっかりと把握することにある。そこで,それにとくに役立つと思われるSFLの構築物に限定し,いくつかとりあげる。SFLは,目的そのものではなく,目的を達成するための手段であり,また,第二言語発達にいとむ現代的アプローチという,よりおおきなコンテキストに位置づけられるものである。このことは,私が把握しているSFLが果たすこ

## 第7章

---

# 日常の言語学

## 一言語の性質と機能についての 一般大衆の深い理解へむけて

M. A. K. ハリデー

M.A.K. Halliday

翻訳 照屋一博

### 1. われわれと言語<sup>1</sup>

#### 1.1 公開講義の難しさ

公開講義<sup>2</sup>は、つねにやりがいのあるタスクであると同時に、むずかしいタスクでもあります。とくに言語についての公開講義、あるいは、言語に関するトピックであれば、それがどんなことについてであっても、かなり挑戦的であり、むずかしいものです。なぜかという、ほとんどの人が、言語について強いアイデアを、そしてそれ以上に強い感情をもっていて、それを考慮にいれないといけないからです。もし、聞き手であるみなさんがもつ見解に同意するとしても、それが間違っているとしても、少なくともみなさんの見解の総意を出発点にして、それに反論していくにしてもです。ではありますが、実際の状況というものは、それよりも複雑です。それは、多くの人が賛同する点があるとしても、賛同しない点だけでなく、実際には、猛烈に反発する点もあるからです。ですから、すべての人にとってプラスにとれる、単一の視点から話をはじめすることはできません。もっとも予期できることといえば、おそらく、みなさんの気分をおなじように害してしまうということでしょう。

## 1.2 言語が果たす役割

過去4半世紀における生物科学の世界的な指導者の一人に、『利己的な遺伝子』やそのほかの影響をもつ著作の筆者である遺伝子・進化生物学者のリチャード・ドーキンスがいます。彼がオックスフォード大学の講座教授に雇われたとき、彼は「科学の一般大衆の理解系教授」として彼を任命するよう要求しました。彼が送ったメッセージは、科学者として彼自身が、「科学する」という行為と、社会における科学の役割、つまり、人間の日常生活において科学が果たす役割とは、わけへだてられないということでした。つまり、科学における一般大衆の理解は、科学者の教育と研究における必要不可欠な関心事であるわけです。このことをほかの分野にいる同僚にはなしたことがあります。その何人かが、彼らの研究課題について同様に感じていることを知っています。たとえば、歴史、医学、あるいは、刑法についての一般大衆の理解などです。ですが、わたしが言語について同じようなことをいうと、驚きを示したのです。それは、おそらく彼らが問題に感じなかったせいであり、人間生活すべてにおける言語が果たす役割についてよく考えたことがないからです。さて、われわれが「情報社会」に生きているということは、いまさら思い出してもらふ必要はないでしょう。われわれのほとんどが昔のようにモノやサービスの交換ではなく、情報の交換に時間を費やしていることをよく知っているからです。それに、情報の管理は複雑でむずかしいタスクであり、しばしば失敗しがちであることも知っています。実際、おおきな事故や叫び声は、必要不可欠な情報の普及、入手や処理の失敗によってもたらされます。(ほんとうに情報時代です。)しかし、思いおこす必要があるのは、情報が言語によってつくられたものであるという事実です。たしかに、表やグラフ、イメージや図など、いろいろな形式であらわれたりもします。しかし、それはすべて言語で解釈することができるものですし、それらを作成したり理解したりすることができるのは、言語を知っているからであって、言語は、情報が解釈される典型的な形式なのです。そういった意味で、言語がなにであり、どうやってはたらくのかという言語の性質と機能について熟知している必要があるのです。

みなさんは、おそらく、社会言語的な状況がつねに一般市民の関心事である香港では、とくに真新しくもなんともないというかもしれません。香港に